

## 九月の雷雨 (3)

フリード・ランペ著  
松川 弘・訳

(平成26年9月10日受付)

### Septembertwitter (3)

von  
Friedo Rampe

Aus dem Deutschen  
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Sep. 10, 2014)

時間が来た。手がメツラー氏の肩に載せられた。「時間だ。あれこれ言わずに来たまえ。」メツラー氏はゆっくり立ち上がり、椅子から山高帽を取り上げて、よろめきながら、幽霊のように真っ青な顔をして母親の前に立った。メツラー夫人は息子を抱きしめ、キスした。そして彼女は、息子が男たちと立ち去るのを見ていた。メツラー氏を真ん中にして彼らはテーブルをすり抜け、はずれで辻馬車に乗り込んで、暗い市民公園の中に乗り入れた。

ボーイ長のヴィリーがメツラー夫人の前に立ち、猿のような茶色い眼で悲しげに彼女を見つめた。「ゲオルクは一体どうしたんだ？彼らは何をしようとしているだね？」

「ヴィリー」と、メツラー夫人は叫び、拳を噛んだ。「あの人たちは彼を連行したんです、私の息子を連れ去ったんです。」

「ゲオルクを？ 彼が一体何をしたんだ？」

「あの女が息子の気を狂わせたんだわ。あの恐ろしい女が。」

「誰のことだね？ 何があったんだ？」

「あのオルフェルスよ。ヴィリー、知ってるでしょう……」

「じゃ、ゲオルクが？」

「あの女がもう好いてくれなくなったというだけで、あの子は……」

「何と言うことだ」と、ヴィリーは言った。

「ご遺族の皆さん」と、メータは言った。彼女は、おなかで手を組み合わせ、黒い雨合羽を羽織り、胸元に小さな

白いよだれ掛けを垂らしていた。「残念ながら夭折しなければならなかった私たちの愛すべき「泣き笑いの顔」を、本日埋葬いたします。彼は、本日の午後早くこの世に生まれましたが、夕方にはすでに死んで横たわっておりました。彼の死を衷心から悼まぬ者は、私たちの間に誰一人いないでしょう。彼は、よい風、愛すべき風、感じのいい風でありました。風のエミールとの戦いの最中、彼は実に立派にふるまいました。あの恐ろしい雷雨がなければ、彼は生きながらえることができたでしょう。しかし、あの雷雨には、私たち人間さえもかないません。「泣き笑いの顔」よ、安らかにお眠りなさい。あなたは自分の務めを果たしたのです。私たちはあなたのことを決して忘れはしないでしょう。」

古い胡桃の木陰におおわれてほとんど月光が差し込まない、物置小屋と墓地の壁の間の一角に、彼女たちは小さな墓穴を掘り、ボロボロになった「泣き笑いの顔」を投げ入れた。アンニは墓のかたわらに立ち、メータが厳粛な弔辞を述べている間、小さなハンカチを目に当ててすすり泣いていたが、話が終わると、拍手し始めた。「メータ、見事だったわ。」だが、メータはその厳粛な態度を崩すことなく、スコップを取って、「泣き笑いの顔」に砂を注いだ。「あなたもおやりなさいよ。」「安らかに眠れ。汝をおおう土よ軽かれ。汝の魂に平安あれ。」アンニは、メータの言葉を繰り返した。

そのとき、ドーラが突然、物置小屋の壁のかたわらに立った。「あなたたち、何て馬鹿なことをしてるの。もうとっ

くに床に就いてるとばかり思ってたわ。」

「泣き笑いの顔」を埋葬してあげただけよ。」

「もう行きなさい」と、ドーラが言うと、少女たちはスコップを放り出して、クスクス笑いながら駆け去った。

「埋葬」という言葉の響きが、ドーラの耳に残った。ここに「泣き笑いの顔」が葬られている。彼女は長い間、本来なら自分がアルベルトとともに腰を下ろすはずだった、胡桃の木陰の空のベンチを見つめていた。

リナはドアを開けた。ホルマン夫人は暗い部屋の窓際に座っていた。「奥様、マルティンが辻馬車で戻ってきましたよ。連れてきてくれた人があったんです。」

ホルマン夫人は窓からのぞいてみた。マルティンが、ジョニー・シュテークマンに支えられて馬車から下りるところだった。馬車にはもう一人年かきの少年が乗っていて、御者と話をしていた。彼女は部屋から出て、暗い廊下を通り、階段を下りて、風よけを抜け、表玄関のドアの前まで歩いていった。「マルティン、帰ってきたのね。ずいぶん待ったわ。一体何があったの？」

「大したことじゃないよ」と、マルティンは言って、当惑したように力なく微笑んだ。彼の顔は青白く見えた。「十分歩けたんだけど、ヤンが乗って行けて……」

「この方がいいと思ったんです」と、ヤンが言った。「彼はちょっと気を失ってしまいましたからね。」

「どうしてそんなことになったの？」と、ホルマン夫人は尋ねた。「一体何が起こったの？」

「あとで話すから、とにかく家の中に入れてよ。」

「顔にひどい擦り傷があるじゃないの？ 誰にやられたの？」と、ホルマン夫人はたずね、ヤンに疑惑の目を向けた。

「誰にやられたのでもないよ。とんでもない。彼はヤン・ゲッチェンなんだよ。」

ヤンは、ホルマン夫人に手を差し出し、お辞儀をしてから言った。「さて、俺たちは退散しよう。君は一人でやり遂げられたんだ。それじゃ、またな、賢明なオデュッセウス。奥さん、済みません。マルティンのために辻馬車を雇ったんですが、あいにく持ち合わせがないもので。」

「リナ、私のハンドバッグを取ってきてちょうだい。部屋の中の裁縫台の上にあるわ。中に財布が入ってるのよ」と、ホルマン夫人は言った。

彼らは、家の前の階段に立って、待っていた。やわらかい風が街灯の回りを流れ、通りは静かだった。辻馬車の馬が蹄で舗道をたたいていた。ホルマン夫人は言った。「とても心配してたのよ。」「だから戻ってきたんだ、ママ」と、マルティンが言った。「風のエミールを殴り倒したとき、マルティンがどんなに勇敢にふるまったか、お見せした

かったですよ」と、ジョニー・シュテークマンは言った。「何のこと？」と、ホルマン夫人は尋ねた。「あとで全部話すよ」と、マルティンが言った。リナがバッグを持って戻ってきたので、ホルマン夫人は財布を取り出した。

「また何か書いたものを読んで聞かせてくださいよ」と、ミンナ・ルンゲは言った。彼らはすでに夕食を済ませ、家の前のテラスで座っていた。雷雨が終わって、涼しくなり、クリスティアン・ルンゲは太いブラジル葉巻に火をつけてふかせた。テーブルの上では石油ランプが燃え、クリスティアン・ルンゲの前には、赤ワインの瓶とグラスが置かれていた。テラスの屋根の下に置かれた籐の安楽椅子に、彼はくつろいでもたれ掛かり、葉巻を吸い、口当たりのよいワインを飲み、土手から彼の方に押し寄せてくる、草花と水のおいがする涼しい空気を吸い込んだ。彼は、風車や白い市立劇場のはるか上空に昇り、次第に輝きを増してくる月を見上げた。クリスティアン・ルンゲの赤い唇もまた輝いていた。

「一体何を読めばいいんだね。」

「今日、雷雨のときに、何か書いてたでしょう。」

「ああ、あれは駄目だよ。まだ完成してないからね。だが待てよ。そういえば、もう一つあったな。」彼はゆっくり身を起こし、部屋に入って、書き物機のランプをつけた。ミンナには、彼が書き物机をあちこち探し回るのが見えた。壕の上方で、市立劇場の破風が次第に白く輝き始め、クリスティアン・ルンゲが一冊の蠟引き布装の下書き帳を手にして戻ってきて、また籐の安楽椅子に腰を下ろしたとき、ミンナは言った。「市立劇場の席を予約するかどうか、もういくら何でも決めなくてはね。来週始まるんですから。」

「まあ、どうでもいいよ」と、クリスティアン・ルンゲは言った。「いつも『タンホイザー』、『トロヴァトーレ』、『ミニヨン』、『低地』だ。もううんざりだよ。ヘンデルやグルックを上演しなくちゃ。それにモーツァルトもだ。彼らは、真正のオペラのことなんか、まるっきり分かつちやいないんだから。」

「とにかく何か読んでくださいよ」と、ミンナ・ルンゲは言う、両手を膝の間に入れ、興味津々身を乗り出した。彼女の上唇の上の口髭は黒ずんで見えた。クリスティアン・ルンゲは下書き帳を開き、言った。「またギリシアものだ。」「今あなたは、ちょっとしたギリシア熱に取り憑かれてるようね」と、ミンナが言うと、クリスティアンはうなずいて笑った。「ああ、可笑しいかね。」それから彼は読み始めた。

太陽は、島の反対側に沈み、もはや見るができなくなった。樹木の生い茂った入江が茶色くたそがれ始めた

き、ナウシカアーは言った。「もう無理ね。」彼女たちはボール遊びをやめ、草の生えた小さな丘の上に腰を下ろし、洗濯物が広げられている浜辺を、そして海の方を見渡した。青い海が次第に暗くなっていくのを見るのはとても気持ちがよかった。彼女たちは満ち足りて長い間沈黙し、静寂を楽しみ、浜辺のざわめきを聴いていた。アルキスが突然話し始めた。「あの時私がレウコスに言ったことをお話ししましょう。」そして彼女は物語り、娘たちはアルキスの厚かましい答えに大笑いせざるを得なかった。「私はそれまで、そんなことを言ったこともありませんでした。あなたに教わったんですよ、ナウシカアー様」とアルキスは言った。「そうね、あなたは見事な山出し娘だったものね」と、ナウシカアーは言った。「だって、あなたがここに来たときは、そう見えただから。」

彼女たちのすぐ後ろで、突然、オリーブの茂みがカサカサ動き始め、人影があらわれた。娘たちは金切り声をあげた。出てきたのは裸の男で、体の前にオリーブの枝をかざし、泥まみれだった。アルキス、アルメーネー、フィアは一目散に逃げ出し、ナウシカアーも飛び上がって逃げ出そうとした。そのとき男が叫んだ。「どうか、ここにいて下さい。私はあなた方に何もしませんから。ちょっと、お尋ねしたいことがあるのです。」ナウシカアーは立ち止まり、振り返った。男はひどい格好で、汚らしかったが、彼の声は美しく、真剣で、もの悲しく、雄々しく響いた。ナウシカアーは言った。「一体何が望みなのです？ 私たちの前に急にあらわれて、何をしようというのです？」オデュッセウスは自分の体を見下ろして言った。「ああ、何という姿だ。私はまだ夢を見ているのだろうか。体を洗いたいのですが、どうか逃げないでくださいね。」

フィアが後ろから叫んだ。「王女様、こっちに来るんです、そんな恥知らずな男はほって置きなさい。」

フィアはナウシカアーのことが理解できなかった。森から姿をあらわして若い娘を永久にかどわかつ恥知らずな妖魔の物語はたっぷり聞かされていた。

「そいつはそもそも人間じゃありませんよ」と、アルメーネーは言った。「それは海の怪物です。」

「ああ、あなたは王女なのですね」と、オデュッセウスは叫んだ。「アテーネー、あなたに感謝します。」

「アテーネーと何の関係があるのです？」と、ナウシカアーは言った。「尻ぬぐいをさせられるのは神々のようね。そんなことより、体をお洗いなさい。」

「はい、はい」と、オデュッセウスは言った。「でも、逃げないでくださいよ。」

「逃げないと言ったら、逃げません。」

最初の波が洗う浜辺に、巨大な岩の塊があった。オデュッセウスはその岩の後ろに姿を消し、娘たちは、彼が水浴び

し水をパチャパチャ体にかける音を聞いた。分厚く堅くなった汚いかさぶたを落としてしまうまで、彼はありとあらゆることをした。

「あなたのなさることは理解できません」と、アルキスが言った。

「もうすぐ、彼の本当の姿が見られるでしょう」と、ナウシカアーは答えた。

「ひょっとしたら、あなたの未来の旦那様かも知れませんよ」と、アルメーネーは言った。

「その覚悟はいるわね」と、ナウシカアーは言った。

「白鳥の中にいるゼウス、牛の中にあるゼウス、私がそれと気づく前に、ゼウスは私のそばにいる」と、フィアは歌った。

「やめなさい」と、ナウシカアーが言った。「彼の声はともきれいに響くわね。」

「暗くなるまで、彼を待っていてもいいですよ。私がその間に洗濯物をまとめておきますから」と、アルキスが言った。そして彼女は、布や着物を折りたたみ、荷車に載せ始めた。荷車を引っ張ってきた小さな灰色のラバが、車のかたわらで相変わらず暢気に草を食べていた。夕暮れの湿った草は、彼にはとりわけ美味しかったのだろう。

すべての成り行きを興味津津見守っていたアテーネーは考えた。ここまではうまくいった。あとは、あの小さな王女が心底夢中になって、オデュッセウスの面倒を見ることだけだ。だが、オデュッセウスの様子を彼女は怪しく思っている。彼はこのごろ心痛と過労を重ねていて、いささか衰弱している。何しろ彼はもう四十を越えているのだから。彼を少しばかり助けてやるとするか。オデュッセウスが岩の背後で水浴びし、海草で体をこすっている間、女神はそっと彼に歩み寄って、彼の体に生き生きした力と若々しさを注ぎ込み、彼の太股を堅くし、胸を前に反らせ、筋肉と腱を引き締め、肩と首の輪郭を魅力的なラインに整形し、彼の目に輝きを与え、額に明晰さと洗練を、唇に血色と生気を、皮膚にしなやかな青銅の褐色を与えた。

だが、ナウシカアーには、浜辺のニンフたちの間に友達がいた。泡の筋をなびかせたアレッパだ。ナウシカアーは、この友達がいることに気づいていなかったが、彼女が洗濯し侍女たちと遊んでいるとき、アレッパは浜辺で密かにナウシカアーの様子をうかがっていたのだ。アレッパは上げ潮から女神に向かって身を起こし、怒りに燃えて彼女をにらみつけて言った。「あなたはオデュッセウスのことしか考えていません。ナウシカアーはどうなるのです？ あなたは彼女を不幸にするおつもりですね。あなたが彼をそんなに美しくしたら、彼女はオデュッセウスから離れられなくなります。でも、彼はイタカに帰らなくてはならないのです。みんなが彼の帰りを待っているのですから。あなた

は、彼がここでナウシカアーのもとにとどまることをお望みですか？ しかし、それは無理です。」「オデュッセウスはイタカに戻るでしょう」と、アテーネーは厳しく言った。「そしてナウシカアーは彼の助けをするでしょう。」「ええ、そしてあなたは彼女を悲嘆にくれさせるのです。」「彼女はすぐにそれを乗り越えることでしょう」と、アテーネーは言った。

アレッパは嘆きながら戻っていき、オデュッセウスが、またオリーブの枝を体の前にかざしながら岩の後ろから姿をあらわした。黄昏の中で彼の体はしなやかで力強い光を放っていた。娘たちは静かに丘の上で腰を下ろし、彼を見つめていた。オデュッセウスが近づいて言った。「お待ちせしました。」そして彼は、ナウシカアーの大きな不安げな目を見た。彼女がなぜ自分の胸や太股、口を見つめているのか、彼は不思議に思った。

「あなたはどなたですか？」と、ナウシカアーは言った。「オデュッセウスです」と、彼は答えた。

「まあ、どうしてここに来られたんですか？ あなたは未だに帰国できないでいるのですか？」と、ナウシカアーは叫んだ。

「ええ、トロヤ陥落以来、私はまだ帰国していません。ポセイドーンが私を追いかけてくるのです。でも、これは長い長い話で、私は疲れました。お助けいただけますか？

この島の名前は？ あなたはどなたで、どこの王女なのですか？」

「ここはステリア島です。ここにはパイアーケス人が住んでいて、私の父アルキノオスが王なのです。』

「そしてあなたのお名前は？」

「ナウシカアーと言います。』

「ナウシカアー。」彼らは互いに見つめ合った。それから彼は言った。「どうか私をあなたのお父様のところへ連れて行ってください。私が帰国する助けをしてください。私は帰国しなければならないのです。』

「ええ、出来る限りあなたをお助けしましょう」と、ナウシカアーは言った。彼女の向こう気、彼女の機知はどこに行ったのだろう？ フィアは、荷車に積んである一番立派な着物、赤い縁飾りのついた白い布を持ってこなければならなかった。オデュッセウスは輝く体にそれをまとい、彼らは帰途についた。

フィア、アルキス、アルメーネーは、白い洗濯物が山と積まれたロバの引く荷車とともに先に立ち、ナウシカアーとオデュッセウスは、少し距離を置いて後を追った。フィアは、ロバの手綱と鞭を手にして、小声で歌っていた。

「白鳥の中にいるゼウス、牛の中にいるゼウス、私と気づく前に、ゼウスは私のそばにいる。』

そしてアルメーネーが暗いトーンで調子を合わせた。

「ほんの数刻しか、彼は私のもとにいない。心の傷口から血が流れるとき、彼はもういない。』

「素敵だわ」と、ミンナ・ルンゲは言った。「もう少し笑いが欲しいけれど、悲しくもあるのよね。もちろん、全体が歪曲されているんだけど。」「それに気がついたかね」と、クリスティアン・ルンゲが言った。

祖母は部屋のドアに近づいて、首を伸ばし、聞き耳を立てた。玄関の窓から、月光が大きなかき鼻をした彼女の顔に降り注いでいた。部屋のドアがきちんと閉まっていなかったの、声はよく聞こえた。マルティンは言った。「彼は、本当に僕の腕に傷をつけて、血を杯にしたたせさせたんだ。そのとき、僕はもう立ってられなくなって、倒れ込んで気絶してしまった。』

「恐ろしい子供たち」と、ホルマン夫人は言った。「私は、気がつかないうちにあなたをあんな粗暴な腕白たちのところへ走らせていたわけね。あなたをけしかけて、あの風のエミールへの憎しみをあおるなんて。』

「それは違うよ、ママ。僕は自分から風のエミールに飛びかかったんだ。僕は彼らの仲間になれてうれしいんだ。』

「でも、ナイフで腕を切られたんでしょう」と、ホルマン夫人は言った。

「そんなにひどくじゃないよ」と、マルティンは言った。「それに今は僕も仲間なんだ。みんな僕の友達なんだ。ディッキーが辻馬車で僕を家に送ってくれたんだよ。』

「あのディッキーのことが、あなたそんなに好きなの？」

「うん、ものすごく好きさ、彼は素晴らしいよ。』

「私には分からない」と、ホルマン夫人は言った。「彼らは与太者よ。』

「いいや、ママ、みんないい奴だよ。』

「冗談じゃありませんよ」と、ホルマン夫人は言った。「あなたはもっと自分の体に気をつけなければ。あたしはそれが心配なの。』

「ビッツスが本物の赤ワインの瓶を家から持ってきたんだ」と、マルティンは一人笑いながら言った。

「くだらないことを」と、ホルマン夫人は言った。「でも、帰って来たんだから、まあよしとしましょう。この顔の引っ掻き傷をご覧なさいよ。』

「構わないよ。』

「もし万一あなたの身に何か起こったらどうするの。』

「どうなるんだい。』

「私は確かによい母親じゃないわ。それでも私のことを少しは愛してくれる？ この無情な母親を。』

それから一瞬静かになり、祖母はカサコソいう音を聞いた。マルティンがベッドで身を起こして、母親を抱きしめ

たのだらうか？ キスの音、かすかなすすり泣きが聞こえ、ホルマン夫人が言った。「マルティン、それは私にはとてもつらいことよ。でも、折り合わなければね。分かりました。あなたが戻ってきてくれたんですからね。」

それからまたしばらく静かになり、マルティンが突然、おずおずと言いだした。「ママ、喪服はもう着ないでね。」「ええ、分かったわ」と、ホルマン夫人は答えた。「明日は赤い服を着ましょう。そうすればおばあちゃんも喜ぶわ。」

確かに、このやり取りを聞いた祖母は喜んでいて。彼女はホッとして戸口から引き下がった。だが、月光に照らされた廊下に出て、部屋に入ろうとしたとき、彼女はまた、胃のあたりに鋭い痛みを感じた。このことをルイーゼに話すべきだらうか、医者に診てもらうべきだらうか？ これは厄介な問題だ。むしろまだ言わないで、痛みが治まるまで待った方がいいかも知れない。彼女は、廊下に置かれた鏡つきの外套掛けに歩み寄った。廊下の窓を通して、明るい月光が鏡に当たり、彼女は、鼻がますます突き出した自分の青白い、やせ衰えた顔を鏡に写してみた。彼女の目には、暗く不気味な脅えが読みとれた。月光が、ひだ飾りのついた黒い襟元の大きな丸いルビーのブローチに当たり、ルビーは、月光を反射して血のように赤黒く輝いていた。

ボーイ長のヴィリーが厨房に戻ってきたとき、彼らが今まで腰を下ろしていた椅子は空で、料理女とスージーが興奮して彼に駆け寄ってきた。「ディルクセンさんがやってきて、彼女を呼び出したの。今話してるところよ。ヴィリー、ひどい話じゃないの？ 彼女、座り込んで何も言わないのよ。忌々しいわね。誰がこんなこと予想できて？」

スージーは、突然、泣きわめきだした。「彼女、かわいそうに。こんな話ってないわよ。」「静かに、彼女が来るわ」と、料理女が言った。彼らは、急いで仕事に取りかかった。料理女は荒々しくアルミ鍋を磨き始めた。ブラシが鍋を引っ掻く音がした。スージーは汚れた食器を積んだ台のところに立った。カップがカチャカチャ鳴った。「彼は何と言ったんだね？」と、ヴィリーは尋ね、猿のような茶色い目で不安げに彼女を見つめた。「分からないわ。もう気が遠くなりそうよ」と言いながら、メツラー夫人は壁に作りつけの衣装戸棚のところに行き、扉を開けて、桜の飾りのついた黒い麦藁帽子と古い黒のコートを取り出した。ヴィリーは、彼女が服を着るのを手伝ってやった。「ありがとう。」それから彼女は出て行こうとしたが、戸口でもう一度振り返り、「おやすみ」と言った。スージーと料理女は急いで彼女の方を向き、深くうなずき、お辞儀をした。「おやすみなさい、メツラーさん。」料理女が急に彼女に歩み寄り、口ごもり、手を差し出した。「メツラーさん、もう来ないの？ また来てくださいよ。」スージーが言っ

た。「また来なくっちゃ。その方がディルクセンさんも都合がいいはずよ。」だが、メツラー夫人は手を差し出すこともなく、「また来れるかどうか……」とだけ言うと、立ち去った。彼女はスイス館の前のテーブルを通り抜けていったが、そこにはまだ客が数人座っていた。楽士たちはもうトランペットを黒い蠟引き布製のケースにしまっていた。パビリオンの燈火は消え、クリの木々の間の灯火も次々に消され、月が、テーブルや椅子、ヴィクトリア湖の静かな水面にその影を落としていた。二人のボーイが立っていて、メツラー夫人がテーブルの間を取り抜け、ヴィリーが彼女の後を追うのを見ていた。「彼に話してみよう。彼はあんたを引き留めるべきだ。あんたが悪いんじゃない。見てごらん。説き伏せてみせるから。」しかし、メツラー夫人は、彼の方を向いて言った。「もうどうでもいいのよ。私のことは構わないで。」そして、ヴィリーが彼女を解放すると、彼女は、明るい月光に照らされながら湖岸に沿って歩き、市民公園の方に曲がると、闇の中に姿を消した。

兵舎のカリジウス少尉の部屋は、弱いランプの光の中にあつた。カリジウス少尉は窓辺に立っていて、彼の両隣にはヘンリー・オルフェルスとディッキー・プレントがいた。

彼らは小声でゆっくり話をしていた。眼前では、荒涼とした四角い兵舎の中庭が明るい月光に照らされ、砂地が灰色に輝き、中庭を取り囲む高い鉄格子が冷たい光を放ち、その背後に通りと暗い家並みが認められた。ドアの前で歩哨の重い足音が聞こえた。月は空の高みで燃えるように、しかし静かに鋭い白光を放ち、その光は空を貫いて、その輝きですべての雲やもやを一掃していた。そして月輪が、くっきりと金属のようなアーチを描いていた。

「それじゃあ、彼が犯人だったんですね」と、カリジウス少尉は言った。

「彼をご存じですか？」と、ヘンリー・オルフェルスは尋ねた。

「いいえ。面識はありませんが、彼女は彼のことを私に話してくれました。私の記憶では、学校友達だつてことでしたね。でも、彼はとても変わったという話でした。」

「彼は、エギディア教会のオルガニストだったんです」と、ヘンリーは言った。

「そうでしたね」と、カリジウス少尉は言って、冷たい光を放つ月と荒涼とした四角い兵舎の中庭に鋭い視線を投げた。「彼女はすべてがいやになったんです。音楽も、彼の享樂も、そして彼の肥満も。彼女はある日、自分のピアノをパタンと閉じ、それから決して弾きませんでした。彼女は平静と明晰を求めたのです。その点で、私たちは一致していました。」

「ええ、でもトルーデは、そのことで自分は彼をととても

苦しめてしまった、自分は正しかったんだろうか、と言っていました。」

「彼女は正しかったんです」と、カリジウス少尉は言った。「彼女は厳格でした。あなたの妹さんは、ご存じの通り、愛想はよくありませんでしたが、それも彼女が明晰さを求めているがゆえのことだったのです。」

「厳格か」と、ヘンリーは思った。彼が棺に横たわる妹を見たとき、電灯が彼女の硬直した顔を照らしていた。彼女の漆黒の髪は、生前彼女が結ったこともないような古風な髪型に整えられていた。鋭い月光の中で、彼は突然ゾツとした。「もうお暇したいんですが。とても疲れました」と、彼は言った。

「ヘンリーさん、ご一緒できなくて済みません。僕はもう少しカリジウス少尉と話をしたいんですが」と、ディッキーは言った。

「構わないよ、ディッキー。私はもう帰る。明日はまた骨の折れる一日になりそうだ。うまく片がつけばいいんだがね。」

「そうですね、弔辞のこともあるし」と、カリジウス少尉が言った。

「もう寝なければ。明日は洗濯日だし、することがたくさんありますからね」と、ミンナ・ルンゲも言った。彼女がバルコニーの戸口に立ったとき、クリスティアン・ルンゲは言った。「ミンナ、今日僕は重い腰を上げて、例のエギディア教会のオルガニストに話を持ちかけた。木曜に彼を招待したんだ。」

「彼が来ると思います?」

「分からんね」と、クリスティアン・ルンゲは言った。「彼はあまり嬉しく思っていないようだった。かなり不機嫌な表情だったからね。でも、あの青年は今日も弾いてくれたんで、「素晴らしい、まったく見事だ」とほめておいた。」

「まあ、待っていきましょうよ。ハルモニウムは、念のため一昨日修理してありますから。それじゃ、おやすみなさい。」

「おやすみ。」

ミンナ・ルンゲは、影のように引っ込んだ。クリスティアンは、石油ランプの黄色い光に照らされたテラスでひとり座って、黒いブラジル葉巻をふかし、赤ワインをすすり、庭や濠、林、風車といった月光に輝く夜の風景に視線をめぐらせ、明るく白く輝く月を見上げた。月は、暗い濠の上に次第に高く昇っていった。

カメルーン、カメルーン — カリジウス少尉は言った。「ディッキー、これはまずいよ。どうするつもりなんだね?」

「十一月で僕は十六歳になるんだ。一緒に行けると思う

けど。」

「両親や学校は?」

「どうでもいいよ。逃げ出すだけさ。肝心なのは、あんたが僕に手をかしてくるってことだ。船で渡航するんだけど、見習い水夫として行ってもいいな。あとで僕をあんたの中隊に入れてくれたらいいのさ。」

「おいおい、それは狂気の沙汰だよ。そんなにここから出て行きたいのかね?」

「商人にはなりたくないんだ」と、ディッキーは不機嫌に言うと、月に照らされた窓台を見上げ、指でその上を撫でた。

「ありきたりの商人なんかになりたくない。」彼は、反抗するように下唇を突き出した。月光は、彼の短く刈られた頭のシルエットをくっきり浮かび上がらせた。兵舎の荒涼とした中庭は明るく輝いていた。歩哨の足音が戸口で大きく響いた。

「友達は、仲間たちは?」と、カリジウス少尉は言った。

「今まで通りやっていこうよ。」

「彼らは君なしじゃうまくやっていけないぞ。」

「ばかばかしい」と、ディッキーは言った。だが、すでに彼は、リールセン造船所の船体の鉄板の上に松明が揺らめき、小さなマルティンが真っ青になって、興奮で目を輝かせながら彼の前に立ち、仲間たちが「死ぬまで仲間には忠実であろう」と歌ったときの様子を思い浮かべていた。

「それは私にはまったくかわりのないことだ」と、カリジウス少尉が言った。「先ほど、君がヘンリーと一緒に来たとき、今度のカメルーン行きをそれほど極端なものにするつもりはないことを、君に告白するつもりだったんだよ。」彼は短く笑い、ディッキーの腕をつかんで、彼をベッドの脇のナイトテーブルに引っ張って行き、引き出しを開けた。「ここにカメルーンへの鍵がはいっている。」

「違う」と、ディッキーは憤慨して叫んだ。「カリジウス少尉、それはいけない。」

「とぼけることはない。私は呪わしい欲情を抱いていた。不実な男だったんだ。だが、今日彼女の遺体を見たとき、花の香りがして、その中で彼女がとてつもなく静かに横たわっているのを見たとき、「カメルーンへ」というささやきを、私は確かに耳にしたんだ。これが、君の行きたがっているカメルーンなんだよ。」

「僕には理解できない」と、ディッキーは言った。

「まだ分からないのか。やれやれ。私はおとなしく船でアフリカに行く。心配するな。そして黒人や蛇、ライオンのもとにとどまるんだ。だが、まあ、君にはその必要はない。君はここに残って、君と君の仲間が正しいやり方を貫くように心がけるんだ。」

「本気でそう考えてるの?」

「もちろんだ。私はもう役には立てない。」

「まさか。」

「もういいじゃないか。私の頭はおかしいんだ。でも、ディッキー、君は……」

「あとでうまく行かなくなったら」と、ディッキーは言った。

「かまわないさ。そのときは私のところに来ればいい。カメルーンに。」

それから彼らはまた、思いに沈んで無言で窓辺に立った。戸口で歩哨の足音が大きく響いた。空虚な兵舎の中庭は、月光に照らされて明るく、鋭く輝いていた。

月は、町の上に次第に高く昇り、町をその輝きの中に紡ぎ込んだ。今日の午後、雷雨が、ざわめきと轟き、うつろな混乱をともなって町の上空で猛威をふるったが、今はそれも過ぎ去り、静かな深夜となっていた。空間は冷やされて光り輝き、湿った大地から立ちのぼった霧やもやすべてを、月がその輝きで焼き払い、屋根や林、船のマスト、造船所の足場が明るく照らされていた。

静かで安らぎに満ちた涼しい夜だった。今はもう、ごくわずかな人々しか起きてはいなかった。ホルマン夫人はまだ、部屋のマルティンの枕元で座っていた。マルティンは疲れ切って、日中の体験に満足しながら眠り込んでいた。彼女は息子の安らかな寝息を聞き、ホッと、開いた窓を通して庭から入り込んできた新鮮で香しい空気を吸い込んだ。詩人のクリスティアン・ルンゲも、支柱のある屋根の下のテラスで、煙草をふかし、ワインを飲み、夢想しながら座り、オデュッセウスとナウシカアの物語を紡ぎ続けていた。兵舎の窓辺には、相変わらず、ディッキーとカリジウス少尉が立っていた。

月光は、エギディア墓地の墓や十字架、すべすべした玄武岩の上に、祖父がこの日シャベルで掘った空の墓穴の中に流れた。

今日、雷雨の混乱の中で荒々しく翼を打ち振り、体を伸ばして鳴いていた濠の大きな白鳥は、今、頭を羽に埋めて、黒い水面に静かに浮かんでいた。彼の羽根も月光を浴びて輝いていた。

安らぎと眠り、そして夢があった。

月は、町の上にその顔を次第に高くかけ、町は次第に小さく、遠くなり、圧縮されて、広大な牧草地のはずれに横たわっていた。月は眠っている町から顔をそらせ、堤防の背後の牧草地や造船所、農家の上に顔をめぐらせて、次第に幅広くなっていく下の川に目をやった。海岸近くの河口部で、一隻の汽船が、銀色の跡を残しながら航行していた。それは「トスカ」号で、その船首にはアルベルトが立っていた。心地よい海軟風が彼の巻き毛とシャツの中に吹き

込み、彼は頭を突き出して、海の香りをむさぼるように嗅いだ。あの暗くて狭い町、墓地の墓石の間にいたドーラのごとは忘れよう、ジェノヴァ、ナポリ、コンスタンティノープルが待っている。

そして月は海の上に昇った。冷気と明るい光の中、海岸からはるかに離れた銀色の静かな鏡のような海上を、気球が飛行していた。吊り籠は静かに垂れ、気球は輝いていた。吊り籠の中には、ペンコック氏と娘のメアリー、操縦士が立っていた。彼らは、気球でドイツからイギリスに飛行する勇氣があるかどうか、ハムステッド氏と賭をしていた。そして今日の午後、彼らはオスナブリュックを飛び立ったのだった。今彼らは、すでにイギリスの海岸近くを飛行していた。操縦士は望遠鏡をのぞいて、標識用の燈火がきらめくのを認めた。

「パパ、とうとうウェリントン・ストリートに戻ってきたのね。信じられる？」

「いや、でもものすごいことが起きた。」

「どういうこと？」

「あの嵐のような雷雨に呑み込まれ、海に沈みかけたことさ。」

「ねえ、パパ、コートを二枚持ってきてよかったわね。」

「コートの襟をしっかりと立ててろよ。」

「かわいそうに、帽子を無くしちゃって。今頃どこを漂ってることやら。」

「ハムステッドが見てたら、びっくりして目を丸くするぞ。われわれがああ雷雨を無事に通り抜けたことを、彼は信じられまい。」

「ドーバーの灯台です」と、操縦士は言って、ペンコック氏に望遠鏡を渡した。

この翻訳は次のものに拠った。

Friedo Lampe: Septembereggewitter. Göttingen (Wallstein) 2001

## 解 説

処女作『夜の果てに』（一九三三年）の発禁と母の死、それらのショックから立ち直るのに、フリード・ランベはかなりの時間を必要とした。

ハンブルクの公共図書館司書の職を辞したランベは、一九三七年六月、ベルリンに居を移し、ローヴォルト書店で原稿審査係として働いていたが、この仕事は最初、彼には荷が重すぎるように思われた。

「引っ越し、ハンブルクとの別れ、グリェンハイデのローヴォルト書店、いささか混乱した社内、私にのしかかって

くる仕事の山、原稿の山、社内の私を訪ねてくるコミカルな人々、これらはすべて、傷つきやすい気性の私にはちょっと荷が重すぎました。』<sup>1)</sup>

だが、ローヴォルト書店のそうした雰囲気、周囲の人々のヴァイタリティが、ランベの創作意欲を再燃させることになる。ハンス・ファラダの新作『狼たちの中の狼』の原稿審査に参加しながら、彼は二作目の小説の執筆を進めた。その小説『九月の雷雨』は、十月に完成した。

年末、ローヴォルト書店から出版されはしたものの、『九月の雷雨』はクリスマス商戦には間に合わず、「大方無視され、ほとんど反響がなかった。」<sup>2)</sup>一九四四年、再版が三冊目の著書『ドアからドアへ』に収録されることになったが、その完成はライブチヒの空襲によって遅れ、結局、実現しなかった。「またしても日の目を見ず、カオスに沈むのではないか」<sup>3)</sup>というランベの暗い予感、現実のものとなったのである。

第二次世界大戦後、この小説は、次第に人々の注目を集めるに至る。アルフレート・アンデルシュは、一九五一年に、ヘッセン放送が『九月の雷雨』をもとに制作した放送劇の台本を執筆し、一九五五年、ローヴォルト書店からランベの一卷本全集が出版されると、ヘルマン・ヘッセは、次のように書いた。

「二十二年前に作家の最初の小説を通してわれわれの心を揺り動かしたものは、色あせることなく時の試練に耐え、以前と同じようにその魅力的な真価を示している。ありがたいことに、今度の全集には数多くの短編が収録されており、その内のいくつか、とりわけ『九月の雷雨』は、私の最初の印象を強め補完してくれた。」<sup>4)</sup>

この小説で、ランベは、登場人物のアンサンブルを必要に応じてまとめ合わせ、各人物を特徴的な場に配置している。また、対立物や対立感情の対比にも意を用いている。大人と子供の領域の対比はその好例で、ディッキー・ブレントが率いる少年団はカリジウス少尉が率いる兵士たちに対応し、「風のエミール」の逮捕は殺人犯メツラーの逮捕に照応する。そして、殺害されたマリー・オルフェルスの埋葬が間近に迫るとき、アンニとメータは「泣き笑いの顔」を埋める。ここでは、風は、その形状と夭逝から、牧歌と危機、快樂と転落の恐怖のあいだを揺れ動く作者自身の、矛盾を内包した生の感情の化身となっている。また、白鳥と墓地のモチーフは、快樂-生と悲嘆-死の感情を繰り返し交差させている。

しかし、最も重要なライトモチーフは、言うまでもなく「雷雨」である。処女作『夜の果てに』における「夜」と

同じように、この雷雨が、小説の本来の主人公であると言えよう。雷雨は、まずもって、空中では死をもたらす危機、地上では浄化とすべての謎の解明を意味しており、平衡という意味でも破局という意味でも浄化的に作用する。雷雨が通り過ぎたあと、重苦しい雰囲気が解消されるやいなや、ほとんどすべてのエピソードが一斉に締めくくられる。

「いくつかの短いシーンが映画のように互いに互いに絡み合いながら進行していきます。」<sup>5)</sup>一九三三年、ランベは、『夜の果てに』で彼が用いた手法をこのように説明している。この『九月の雷雨』においても、読者は、一見したところまったく無関係な短いシーンの中に何の説明もなく投げ込まれる。これらのシーンが巧妙に絡み合わされ、映画の画面のようにかすめ過ぎ、近景と遠景、細部と全体が巧みに織り合わされている。

ランベは、パンショット、ズーム、フェード・オーバー、カットといった映画の技法を意識的に取り入れ、パースペクティブとイメージを緊密に結合させる。

並列された多くの場面が、時（二十世紀の初め、第一次世界大戦直前の、ある九月の午後から夕方まで）と場所（北ドイツの川沿のある町、たとえばブレーメン）、小説の本来の主人公である雷雨により結び合わされる。雷雨は刻々と接近し、襲いかかり、轟音とともに降り注ぎ、浄化と悲哀とをあとに残して立ち去り、夜と冷たい清澄な月にその席をゆずる。

この小説の基本構造は、動きに欠け、蒸し暑く、重苦しい下界の町と、軽やかに、明るく、自由に飛翔する上空の気球という二つの極のあいだに固定され、この両極は、雷雨の高まる緊張感という対角線で結び合わされている。

雷雨は、単なる自然現象以上の存在であり、停滞の後に必ず起きる爆発、ちっぽけな人間の運命にたいする歴史の力を意味している。それは、具体的には、間近に迫る第一次世界大戦であり、当然のことながら、第二次世界大戦の危惧や予感もそこには込められている。いずれにせよ、雷雨は、人間の運命の制御不可能な動因であって、人々の錯誤の苦悩に満ちた解消、冷酷な解決をもたらすのである。

すべてのものが、その兆しははっきりと見て取れる大きな災厄の到来を、息を潜めて待ち受けている。灰白色の空の下、暗い地平線に閃く稲妻にストロボスコープのように照らされて、人々は動き回る。市民公園の園亭のそばで殺されたマリー・オルフェルス、ハサミを手に野原を忍び歩く「風のエミール」、水泳場で対抗策を練るディッキー・ブレント麾下の少年団、婚約者の死で絶望の淵に沈むカリジウス少尉、犯行の露見を恐れるオルガニストのメツラー。彼らは、刻々変化する状況下で、それぞれ不安に苛まれながら行動する。

さまざまなシナリオが、子供たちの風紐と気球の乗員の



手から手へと渡る望遠鏡で形象化されている。そうしたシナリオに繋がれて漂うカメラのレンズを巧みに交換しながら、ランペは、ひとつの舞台空間を現出させる。そこでは、すべての時空が、予兆と追憶を短絡させる共感覚的な場に収斂している。現在と未来、生と死、はかなさと永遠、町の狭さと空や海の広さが織り合わされ、個々人の運命がそれを凌駕する自然現象と結び合わされる。夢と現実が結合されていると言ってもよい。

また、この『九月の雷雨』では、さまざまな登場人物たちの日常が巧みにコラージュされ、ひとつの世界にまとめ合わされている。彼らは、多かれ少なかれ他者の目、他者に見られることを過度に意識しており、自己の内面ではなく表層にたいする意識を次第に強めていく。そうした登場人物たちのさまざまな表層を交錯させることで、ランペは、彼らの日常をコラージュし、生と死の境界が消失しかねない異様な世界へと彼らを誘い込んでいく。

生と死が瞬時に転倒しかねない危うい感覚が、彼らの日常を次第に覆いつくす。表と裏、向こう側とこちら側といった関係が消え、すべてが表層と化した異様な世界が立ち現れる。町の上空を漂う気球の乗員たちの視線は、そのような世界をリアルなものにするのに、視覚的に大きな役割を果たしている。

消費社会の中、生活が均質化された環境では、目の前の現実を異化するような外部というものが失われがちである。気球を登場させることで、ランペは、目に見えない境界線を引き、外部が失われた閉塞的な舞台空間を設定しているとも言える。そして、ラストで町を襲う雷雨が、登場人物たちを表層の呪縛から解放し、彼らに自分が生きている世界を見直す契機を与えることになる。拘引されたメツラーは自分の罪を素直に認め、カリジウス少尉もカメルーンに新天地を見出す。夫の死によって錯乱の一步手前まで来ていたホルマン夫人は生に復帰を果たす。

ランペが問題にするのは、事件の顛末ではなく、子供たちの風になされた「泣き笑いの顔」に象徴される人間の生のモザイクの叙述なのである。

ドイツが破局に向かって突き進みつつあった時代に、ラ

ンペは、日常の牧歌の疑わしさを認識し、個人の孤独や現実の断片化といった、時代の根本問題のいくつかを見抜いていた。

「私たちの未来は実に暗澹たるものです。今日、牧歌の存在理由を、私たちは一体どこに求めればよいのでしょうか？ おそらく今までは何らかの存在理由があったに違いありません。ただ、私たちがそれに気づかなかっただけです。今、現実の真の相貌があらわれたのです。」<sup>6)</sup>

「私は、以前にも増して、この時代と恐ろしい出来事の数々を浄化のプロセスとして理解しようと努めています。私たちは、すべてのものに別れを告げるべきです。死んだ身になって生をのぞき込むべきです。生と死の不安を克服する術を学ぶべきです。」<sup>7)</sup>

『夜の果てに』と同じく、この作品もまた、ますます捉えがなくなっていく現実を文学に定着させることで認識し、克服しようとするランペの実験的な試みのひとつと見なすことができよう。

#### 〈注〉

- 1) Friedo Lampe: Briefe. Hrsg. von Johannes Pfeiffer. In: Neue deutsche Hefte (Mai 1956), S.110.
- 2) Wolfgang Koeppen: Friedo Lampe und Felix Hartlaub. In: Merkur. Deutsche Zeitschrift für europäisches Denken (1957), S.501.
- 3) Friedo Lampe: Briefe. a. a. O., S.122.
- 4) Jürgen Dierking: Die Augen voll Traum und Schlaf. Zum Werk des melancholischen Idyllikers Friedo Lampe. Blick in die Rezeptionsgeschichte. In: Friedo Lampe, Das Gesamtwerk. a. a. O., S.354.
- 5) Friedo Lampe: Briefe. a. a. O., S.108.
- 6) Friedo Lampe: Briefe. a. a. O., S.120.
- 7) Friedo Lampe: Briefe. a. a. O., S.122.

